
水分過多な物語

夜刀鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水分過多な物語

【Nコード】

N4452L

【作者名】

夜刀鴉

【あらすじ】

森の中で、記憶喪失となって倒れていたマナ。

偶々通りかかったメイフィアと、村で医者をしていたレティスによって、命は助かったが、思い出せるのは名前と知識だけ。

果たしてマナは何者なのか？マナは記憶を取り戻せるのか？はたまた、メイフィアの着せ替え人形となってしまうのか？

相変わらず妙な意味でチートっぽい主人公が織り成す。微妙奇妙な物語。よろしければご覧下さい。

Arcadiaにおいて投稿中です。ついでにタイトル名変更し

ました。

第1話 行き倒れの記憶喪失（前書き）

結構ご都合主義交じりかもしれませんが。

後、主人公はチートです。その辺りが苦手な方はご注意ください。

第1話 行き倒れの記憶喪失

酷い、耳鳴りがする。体中で酷い悪寒がする。

意味が解らない。まぶたも、体も、酷く重くてだるい。

「うゝ……あゝゝ……」

我慢できずに呻き声を出す。声がかすれているわけでは無いらしいが、だるくてうめき声以外出せそうに無い。

少しずつ体に力を込めて、動かしてみる。……ほとんど動かないが、激しい痛みなどは感じない。

感覚が麻痺しているのか、あるいは単に体が冷え切っているだけなのか……どちらにせよ、今の状態が危険である事には変わりないと思う。

今度はまぶたに力を込め、何とか辺りの景色を目に映す。

周囲は薄暗く、草や木が生い茂っているのが見える。……恐らくは、ここは森の中なのだろう。

何とか呼吸を繰り返しながら、現状を考える。

恐らく、今のボクは体中が麻痺していて、身動きが取れない。助けを呼ぶにも声は小さいし、と言うかうめき声しか出そうに無いし。場所は恐らくどこかの森の中。少なくとも、倒れていて安全な場所ではなさそうだ。

この状況でボクが打てる手は……助けを待つか、体の回復を待つか。

体が冷えてて麻痺している事を考えれば、待っていても麻痺から

回復することは多分無いと思う。

そうになると、かなりの運任せになる。恐らくこのままだと、待っている結末は餓死か凍死か狼辺りの餌だろう。その中ではまだ、凍死が一番マシ、かな？

「え？あれ？……人？？ねえ君、大丈夫？」

そんな事を考えていたら、誰かの声が聞こえて来た。存外、ボクは運に恵まれているらしい。

「うわぁ……可愛い お人形さんみたい。えっと、拉致監禁しちゃって良いのかな？」

……訂正。ボクはあまり運には恵まれていないようだ。

助からないよりはマシ、とか思えるかもしれないけど、行き倒れを見て拉致監禁って……下手すると、『死んだ方がマシ』な目に合わされそうなんだけど。

「えっと、周りには私しか居ない……よね？」

いや、ボクが居るから。もっとも、ボクは拉致対象なのでカウントされていないだけだと思うけど。

「う……ら、らち……しな……」

このままだとマジで拉致られそうなので、何とか口を開いて抗議をする。

「ふえ！？………お、おねーさん、何も聞こえなかったかなー」

ちよっ

「うふふふ、私専用の着せ替え人形ゲットって、冷たっ!？」

「うぶっ」

余程ボクの体が冷たかったのか、一度ボクを抱え上げたあと、そのまま地面に落とす誘拐犯。

「あわわわ……ご、ごめんなさいっ次はちゃんと抱えるから」

そう言って、今度はしっかりと抱える誘拐犯。ああ、拉致されるのだとわかってても、人肌が暖かい……。

「えへへ、抵抗しないってことは、お持ち帰りしても良いってことだよな？」

お嬢さん。それは本人に、抵抗する力がある場合のみ適用される言い訳でしょうが。

再度抗議のために口を開こうとするが、その前に暖かみを得た体が眠気を催してくる。

まずいなあ……. と思いつつも、圧倒的な眠気には抗い切れず、ボクはそのまま意識を失っていった。

チュンチュン。と小鳥の鳴く声が聞こえる。

うつすらと目を開けると、朝日が差し込んでいる。なるほど、これが有名な朝チュンと言うものか。

……何かを盛大に間違えてるような気がするが、気にせずゆつくりと目を開ける。まぶたが非常に重いのは、まだ眠り足りないと言う事なのだろうか。

「……知らない天井だ」

ネタの好機は逃さない。とか、さっきから何を考えてるんだろう？ボクは。

先ほどから頭を掠める良く分からない衝動に首をかしげながら、ベッドから体を起こして辺りを見回す。

「しくしく……」

なにやら床に、巨大な糞虫らしき物体が転がってた。え？何これ怖い。

「だして、誰か出して」

もぞもぞと動きながら、鼻声で嘆き声を上げる糞虫。一応、人語は話せるらしい？

じゃ無くて、何か人がロープでぐるぐる巻きにされてるのか、これ。これは新手の放置プレイ？いや、相手を泣かせるのはマナー違反でしょ。

助けてあげようかな？とは思うものの、手足は非常にだるくて動きたくない。寒気やら何やらは大分収まってるけど、多分まだ体力が戻って無いんだと思う。

「ほんの出来心だったんです、だから出して下さい」

出来心って、一体どれほどの事をしでかせば、こんな事になるのやら……。

そんな事を考えていると、部屋の扉が開き、中に人が入ってきた。

「ええ加減少しは反省しよったか？つと、そっちも起きたんやな」

入ってきたのは、赤髪短髪の女の子。……って、ひょっとしてこの女の子がこの養虫さんを作った張本人？

「え？あの子、目を覚ましたの？」

「うわっあんま気味悪い動き方すんなや」

「そ、そんな事言ったって、大体私を縛ったのはレティスちゃんじやない」

うねうねと動いて、こちらに頭を向ける養虫さん。確かに気持ち悪い……ってそうじゃなくて。

「えと、貴方方が助けてくれたのですか？」

「ん、そやで」

「私が村まで運んだのよ？えっへん」

どうやらこの二人は、私の恩人で間違いないようだ。

「助けていただき、ありがとうございました。えっと、その……それで、そちらの方は、何故縛られてるのです？」

それならば、出来ればその糞虫状態は開放してあげたいと思う。と言うか、恩人が床に転がってて自分がベッドに寝てるとか、凄く心苦しいわけで。

「ああ、この阿呆はあんたの寝込みを襲おうとしたからな」

「そ、そんな事しないわよ。ただ単に、服を脱がそうとしただけじゃない」

……ええっと、好意的に見れば寝苦しそうだったから……とか？

「これだけ可愛いんだから、少しぐらい裸が見たくなって脱がそうとしたって、不可抗力でしょ？ね？ね？」

「悪いけど、その理屈が通るんはあんただけや。この阿呆が」

うん、無理。さすがにそれは擁護できない。っていうか、したくない。

そういえば、気を失う直前は拉致監禁とか言ってたな～と思いつつ、糞虫さんに軽く冷たい視線を向けてみる。あ、何か青褪めた。

「あわ、あう、その、う、ごめんなさい」

「はあ……そらまあ、普通そんな事言うとれば嫌われるわな」

「え、ええ……き、嫌われちゃったの？私」

なにやら悲痛な声を上げる蓑虫さん。……やれやれ。まあ、命の恩人である事は違いないわけだし。

「はあ、まあ良いですよ。ボクの命を救ってくれた事には変わりないのですし」

ボクのその言葉に、蓑虫さんの表情がぱあっと明るくなる。

「本当！？ありがとう……！」

そして、狂喜乱舞の変わりにうねうねと動く蓑虫さん。……何かキモイ。

「キモッあんま蠢くなや！この虫っ……！」

「酷いッ！？」

「ま、冗談はさておいて。これから自己紹介しとこうやないか」

蓑虫さんの縄を解き、仕切りなおす赤髪の女の子。

「うちの名前はレティスや。それでも、この村の医者をやっとんねんで」

「私の名前はメイフィア。村のお姉さん役をやってるのよ？」

「村の足手まといの間違いやろ」

「ひど〜いつ」

笑いながら、漫才のような挨拶をする二人。赤髪短髪の背が低めな女の子がレティスさんと、桃髪長髪の女の子の人がメイフィアさんね、覚えた。

「それで、あんたの名前を覚えてくれへんか？」

「うん。ボクの名前は……」

……アレ？

名前……ボクの、名前は……。

「……ん？つて、ちょう、大丈夫なんか？」

あ、たまが。痛……割れる、ようにっ……。

「え？え？」

「無理したらあかんで。おちつき」

「ぐつうう……だ、だいじょうぶ」

一瞬、一際大きな痛みが走って、その後痛みが引いていく。そのせいなのかそのお陰なのか、名前は何とか思い出す事が出来た。

「ボクの名前は、マナ、です。でも……」

でも、それ以外の事が、

全然、思い出せない、よ？

第2話 現状把握

チュンチュン。と小鳥の鳴く声が聞こえてくる。

うつすらと目を開けると、部屋に朝日が差し込んでいる。どうやら朝になったようだ。

「しらな……って、昨日見た天井だし」

天井ネタを天井とはこれいかに。とか、また朝チュンか。とか、良く分からないネタが思い浮かぶ。

そもそも、朝チュンは相手が居なければ成り立たないはずだし。たとえばこんな風に、横にメイフィアさんが寝ているとか……。

……オイ。

「んにゅふふふ……マナちゃん」

何でいきなり、ボクの寝てるベッドにもぐりこんでんすか。このロングピンクは。しかもボクに抱きついてきてるし。

昨日寝たときは、確か違うベッドどころか違う部屋だったはずなのに……一体いつの間にもぐりこんだのやら。

とりあえず、このままでは体を起こす事も出来ないの、何とか引き離す事にする。が、相当強く力を込めてるのか、ボクを抱え込んだまま動く様子が無い。

命を救ってもらった手前、あまり邪険にはしたくないけど、さすがにこのままって言うわけにも行かない。とりあえず揺さぶってみる。

「ふにゃあ？ z z z ……」

一瞬目を覚ましたか？ と思ったが、依然眠りこけたまま起きる様子が見えない。

「メイフィアさん。朝なのですよ？」

再度ゆさゆさと揺らしながら声をかけるも、全然起きる様子がない。それどころか、

「んふふふ、マナちゃんってば可愛い」

「むぐつ！？」

ボクの頭に腕を回して、胸に押し付けてくる始末。……ちよつと、息苦しいんだけど。

「むゝむむむゝ！ むゝ！」

「んゝ、マナちゃん、くすぐりたいよ」

……このロングピンク、本当は起きてるんじゃないか？ だとすると、ボクに無いモノを押し付けるこの行為は、ボクに対する嫌がらせ？

「z z z z z z ……」

くつ、ここまで来ると本当に嫌がらせのようにも思えるけど、この人のことだから恐らく天然な気がする。それは昨日の一日だけで

十分思い知らされたし。

……もつとも、昨日のアレが擬態なら、また話は変わるのだけど。

「むにゃあ、お姉さんは頼りになるでしょ」

いや、ありえないから。昨夜張り切って料理を作ろうとして、とつもない惨状を築き上げた事は、鮮明に記憶に残ってるから。

レティスさん曰く、メイフィアさんはあらゆる家事において、やる気はあるけど一向に上達せず、破壊と混沌を撒き散らす壊滅的家事能力者なのだそうだ。

初めは、いくらなんでもそれは言いすぎなのでは？と思ってはいたのだけど……得体の知れない物体を製造しながら、調理器具やらを破壊していく様を見る限り、言いすぎとも言えない気はする。

まあ、それはともかくとしても、昨日拾ってきたばかりの記憶喪失の不審人物を抱き枕にする時点で、あまり『頼り』にするべきではないと思う。まあ、その不審人物相手に言っているのだから、それはそれで複雑なのだが……。

「むう」

これで熟睡してるのだから、本人は何らかの理由でボクを信頼しているのだろうけど。なんだかなあ……と思いながら、ボクはメイフィアさんが起きるまでメイフィアさんを揺さぶり続けていった。

結局、レティスさんが来るまでメイフィアさんが起きる事は無く、メイフィアさんはレティスさんの力カト落として、文字通り

叩き起こされる事になったわけだが。

「読み書きなんかは、一通り出来る見たいやな。それに、結構いろんな知識ももつとるようやし。記憶喪失って聞いとるけど、その辺りはどうなってるん？」

朝食を取り終え、ボクの現状をある程度把握した後、レティスさんはそう切り出してきた。

ちなみにメイフィアさんは、ボクを膝の上に乗せてボクの髪の毛を弄っている。

「ええつと、言い方が難しいのですが、知識は残ってるけど思い出のようなものが消えている……という感じですね」

「？」

首を傾げるレティスさんに、ボクは目の前に置かれていたペンを手に取る。

「たとえば、これが物を書くための道具で、『ペン』と言う名前で

ある事は覚えてます。そして、このペンを作るための材料や、どんなペンが書き易いかということまで覚えています」

正直、材料から作り方まで頭に浮かぶとは思わなかったけど……記憶を失う前のボクって、一体何やってたんだろ？

「ただ、このペンの作り方を教えてくれた人とか、どのような経緯でこのペンと言うものを知ったのか？とか、そういったことが一切思い出せないのですよ」

要約すれば、昨日以前にボクが何をしてきたのかを全て忘れた、と言う事なただけだ。

「なるほどなあ……」

「正直、ボクの事は自分でも怪しいと思っています。なので、ここに置いて欲しい、などとは言いません」

具体的にどれくらい怪しいかって、自分の知識の中に、飛行機や自動車といった、明らかにこの世界ではオーバーテクノロジーな……異世界の知識が紛れ込んでいる事。

その知識を何処で得たのが不明瞭な割りに、その知識が異世界の知識である何となく確信してる辺り、不思議な話ではあるけど、今のボクは自分からその知識を漏らすつもりはあまり無いけど、記憶を失う前はどうかだったか分からない。下手をすると、ボクを追いかけてくる人が居る可能性もある。

幸いな事に、ボクの知識の中にはサバイバルの知識もあったりするから、ここを出てもすぐに野垂れ死になんて事は無いはずだ。……既に一度行き倒れになってる時点で、その知識が役に立つのかは

ちよつと不安だけど。

「だから、今日にでもここを」

「あゝ……何か勘違いしとるみたいやな」

ボクの言葉をさえぎるように、レティスさんが告げる。

「うちは何も、マナをここに置いたらあかんなんて言うてへんで？」

「え？でも」

「それに、怪しいからうちゅうてこんな幼い子をほっぽり出したら、
うちらが後ろ指さされるうちゅう話や」

「う、それは……」

メイフィアさんがボクを拾ってきたことは、既にメイフィアさん
経由で村人達に知れ渡っているらしい。

さらに、ボクは傍目からは10歳にも満たない女の子に見えるら
しく、確かにそんな子供を放り出したら何かと問題になるかもしれ
ない。

実際の年齢は、知識量から考えると100は超えてそうなんだけ
ど……。

「何より、うちが何と言おうとも、メイフィアがマナを手放すとは
到底思えんで？マナは、どっか行く当てとかあれへんのやろ？マナ
が一人で野宿とか、認めるわけあれへんやろ」

「当たり前よっ！こんな可愛い子を外の冷たい風にさらすなんて、
考えただけでも恐ろしいっ」

「あゝ……まあ、そんな訳だな。実際のところ、マナには選択肢なんかあらへんのや」

……何とも、お人よしな人たちだと思う。だって、少なくとも、

「でも、ボクを拾っても、貴方達に得する事なんて無いのに……」

ある程度知識はあると言っても、ボクはどうやら見た目相応の体力しかないらしい。得体の知れない子供である事を考えれば、そのまま置いておくと言う選択なんてありえないはずだ。

「はあ……何言ってるねや。あんたみたいな子供が、そんな事言うもんぢやうで？」

いや、レティスさんにはあまり言われたく無いような……レティスさんって、多分13か14くらいの女の子だよね？

と言うか、この年齢で医者って言うのも凄いような気がするんだけど、この村ではそれが当たり前なのかな？あまり、突っ込みは入れないほうが良いか。

「うち達がええっちゅつとるんやから、居ったらええねん。大船に乗ったつもりで、難しい事は全部うちに任せときい！」

そういつて自分の胸をドンツと叩くレティスさん。

「私も、頼りにして良いのよ？」

「メイフィアは泥舟やんか。うかつに乗ったら、沈んでまうがな」

「ひ、酷い。そんな事無いわよ。私だって立派な大船よ？」

タイタニックですね。解ります。

……こうなってしまったら、しょうがないと思う。こういう人たちは、きっと今の状況でどれだけ拒絶しても、押し通してくるのだから。

だったら……それならば、せめて。

「解りました。なら、せめて何かお仕事をさせてください」

少しぐらいは、役に立たせて欲しいと思う。

いや、別にNEETと呼ばれたくないからって言う理由では、ないのですよ？ホントデスヨ？

「えー、マナちゃんはお姉さんのそばに居てくれるだけで良いのに……ついでに、いろんな服さえ着てくれれば」

いや、それだとマジでNEETになっちゃうし。

「それはダメですよ。ボクだって、家事ぐらいなら少しは出来るんですから。あと、着せ替え人形は勘弁して欲しいのですよ」

「ん、せやったら、今日からでも家事の手伝いしてくれへんか？」

ボクの提案にレティスさんの方が乗ってくれたので、話をそのまま進める。

「はい。まだ体調が完全に回復したわけではないので、無理は出来ませんが……」

「無理をしるとはいわへんよ。うちは医者やし、その辺りは信用してくれてええで」

うん、大丈夫そうだ。問題はボクの知識にある家事の方法が、ちゃんと通用するものなのかだけど……それは追々と言うか、家事自体はやった事あるわけだから、道具が違ってても慣れる事は出来るはず。

「はい。それじゃあ今日から、よろしくお願いします」

「いやあ……助かるわ。メイフィアは家事もでけへんし、いつそメイドでも雇おうかと思っとったぐらいやからなあ」

「メイド!？」

メイフィアさんが、メイドと言う言葉に過剰反応する。……何か、嫌な予感がするんだけど？

「ふ、ふふ、うふふふつ。そうね、そうよね。何で気付かなかったのかしら、私。マナちゃんが家事を手伝うって事は、つまりはメイドさんになるって事なのよ!？」

「いや、その理屈はおかしいです」

「コレには言っても無駄やで、多分」

ボクのツツコミを無視して、メイフィアさんがさらにヒートアップする。

「つまりそれは、マナちゃんはメイド服を着なければいけないって言う事よっ！こうしちゃいられないわっ！」

「だからその理屈は……って、速ッ!？」

「ああいうときだけは、妙に動きが良くなるんよな……不思議ゆうべきか、性質悪いゆうべきかは迷うところやが」

いや、と言うか止めて欲しかったなと。被害来るのは間違いなくこっちだし、原因は多分レティスさんなんだから。

この後、どこからとも無くメイド服を調達してきたメイフィアさんとひと悶着あったが、結局は押し切られ、ボクはそのメイド服を着る事になってしまった。

「可愛い女の子なんだから、ちゃんと着飾るべきよっ」

まあ、ボロ布をずっと着ているよりはマシなただけ。

一瞬、こんな可愛い子が女の子のはずは無い!!--と言う、謎の言

葉が頭をよぎる。こういったネタが頭に浮かぶたびに、一体誰がこんな言葉をボクに教えて来たんだろうか？と言う疑問がわくのだが……。

折角頭に思い浮かんだわけだと、冗談交じりにメイフィアさんに聞いてみる。さすがにコレは、軽く冗談で返してくると思うし。

「もし、ボクが男の子だったらどうする気だったのです？」

「男の娘……？そ、それはそれで……むしろソレで……！」

メイフィアさんの目と表情は、何処からどう見ても本気と書いてマジと読む状態です。本当にありがとうございました。

……ええ、理解しましたよ。きっとこの人はダメな人なんだと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4452/>

水分過多な物語

2010年10月8日15時17分発行